

報告



第11回 北東3支部技術士交流研修会(新潟)

(社)日本技術士会北海道支部 事務局次長
技術士(建設/総合技術監理部門) 森

隆 広

1. はじめに

第11回北東3支部技術士交流研修会は、北陸支部が担当し、日本技術士会の高橋会長をお招きし、2009年3月13日新潟市の技術士センタービル8階会議室にて開催されました。研修会には北陸、東北、北海道の各支部から総勢66名の方々が参加し、北海道からは発表者である櫻井技術士、柴田技術士の2名の他、大島支部長、齊藤副支部長、事務局(大谷事務局長、森、植村事務局次長)、田川業務委員長を含め合計8名が参加いたしました。

以下、研修会の内容について報告します。

2. 研修会の概要

(1) テーマ

今回は「里山・里海～海は山の恋人～川は仲人～里海、里山を考える」をテーマに開催されました。

(2) 挨拶



写真-1 開会の挨拶をされる中山北陸支部長

最初に北陸支部の中山支部長が今回のテーマの背景と説明を含めて挨拶され、続いて高橋会長が最近

の社会情勢の話題を含めて挨拶されました。高橋会長は、要約すると主に次の3点について意見を述べられました。

- IT (WEB) の発達によって情報が瞬時に全世界に伝わるようになり、世界が同時に不景気感に陥るようになった。
- 今までは経済成長による仮需要に支えられ、本当に必要としない人々も買っていたが、これからは実需要に支えられた産業が残る。世界的に産業の再構築・再編が起こる可能性がある。一つは「エネルギーと環境の問題」、一つは「人口の問題」、一つは「食料と安全保障の問題」が重要である。
- これからは一次産業に先端技術力を駆使すべきである。ここには技術士の活躍の場があるはずである。



写真-2 挨拶される高橋会長

(3) 各支部近況報告

挨拶の後、以下の3名の方々より各支部のそれぞれ

れ近況報告がなされました。3支部の中では相対的に北海道の会員数の増加率が高く、また、活動も活発な状況が理解されたのではないのでしょうか。

- ・北海道支部：大谷諭事務局長
- ・東北支部：橋本正志 CPD 委員長
- ・北陸支部：大谷政敬事務局長



写真－3 大谷事務局長



写真－4 橋本 CPD 委員長（左）と大谷事務局長（右）

(4) 研修発表会

各支部から2編ずつ、合計6編の発表がありました。

【北海道支部】

- 「森林が河口域の水産資源に及ぼす影響について～河口域に堆積する落ち葉とクロガシラガレイの関係～」北海道立中央水産試験場 櫻井泉（水産・総監）

- 「地域と『共に学び、共に感じ、共に創る』活動から」飛鳥建設(株)東日本土木支社 柴田登（建設）

【東北支部】

- 「里山の保全と草木塔の風景」山形県技術士会 三森和裕（建設）

- 「伊豆沼・内沼の自然環境と保全」(財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 嶋田哲郎（環境）

【北陸支部】

- 「里山・里海を考える——生物多様性と日本人——」アルスコンサルタンツ(株) 大深伸尚（建設）
- 「里山・里地・里川・里海の再生に向けて」(株)グリーンシグマ 設楽治（建設）

今回の発表内容は、テーマに対して環境問題を多方面からの視点でアプローチしており、生物・自然・教育・文化・歴史などの切り口で研究されていたので、堅い技術系の話だけではないこともあり、興味深く聞かせてもらいました。

最初の櫻井技術士の発表は、森林が持つ「魚つき林」機能に関心が集まっていることを受け、森林が川や海の水産資源に及ぼす影響の解明に取り組んできた研究内容でした。研究の過程の中で河口に堆積する落ち葉に着目し、これが小動物や魚類に利用されている実

態を明らかにすると共に、魚類の生育に対して落ち葉がどの程度寄与しているかを評価した研究成果を紹介されました。北海道立水産試験場にて行ってきた専門的な研究成果の発表なので、まさに学術的なレベルが高い印象を持ちました。

続く柴田技術士の発表は、北海道支部の地域産業研究会（地域活性化分科会）の活動を紹介したものでした。専門技術者がその専門の技術と経験を活かして地域の方々とその地域資源等（自然、人々の生活の知恵、郷土愛など）とのコラボレーションで活性化の芽を探

す活動に取り組んでいる事例を紹介されました。具



写真－5 櫻井技術士
（北海道支部）



写真－6 柴田技術士
（北海道支部）

体的には寿都町の森林資源調査、森林教育活動、植樹活動、町民参加による海岸清掃「寿都町クリーンアップ作戦」の実施などの他、ハマボウフウ試験栽培の経過について報告されました。特にハマボウフウ試験栽培では地元新聞に掲載された様子やご祝儀価格でホテルに引き取って頂いた成果については、出席者から感心の感想がありました。北海道支部の活動が多様で活発なことが十分伝わったものと思います。

3 番目に三森技術士が、道内では馴染みのない「草木塔」（そうもくとう）と里山の関係について研究成果を発表されました。この「草木塔」は、何故か山形県の米沢を中心とする置賜地方に集中しており、全国的にも江戸時代の建立石碑は、県外には福島県喜多方市と岩手県沢内村に1基ずつあるだけだそうです。この「草木塔」が多い置賜地方は、森林愛護と森林畏敬の思想が具体化されている特徴的な場所であり、「草木塔」を通して里山の保全や森林利用などについて興味深い話を聞くことができました。



写真－7 三森技術士
(東北支部)

4 番目は、嶋田氏が伊豆沼・内沼の貴重な自然野生物がこの半世紀の間に衰退している現状と課題、それらに対する保全対策等について報告されました。

人間が持ち込んだ特定外来種オオクチバスなどの外来種の繁殖や富栄養化による在来種の減少などが生じ、それに対する保全活動の状況を知ることができました。



写真－8 嶋田氏
(東北支部)

5 番目は、大深技術士が生物発生の起源から生物の絶滅と進化の過程を経て今に至る話、里山・里海

が国際共通語として認定されていること、人々の暮らしの中の生物多様性、レッドデータブックなど、様々な話をされました。しかし、発表時間をオーバーしたため、まとめが分からないまま終了してしまったのが、個人的には残念でした。

最後に北陸支部の設楽技術士が、里山は猿やイノシシまで里に下りてくるほど荒れており、里地の農村も休耕地が広がり荒れており、同様に川も荒れており、海も磯焼けなどで荒れている状況に対して、上流から下流まで一体的広域的な再生の戦略、多様な価値再生に経済的な価値再創造の戦



写真－9 大深技術士
(北陸支部)

略が必要であると説明されました。これら里山・里地・里川・里海の再生のいくつかの試みを紹介していました。山城の環境・文化の再生のきっかけを期待されて行われた「にいがた狼煙プロジェクト」、農家と非農家が農業利用から、環境、景観、生活、防災、消雪、親水、交流などの用水機能を再現させ、地域住民にとって“宝”と言える魅力的な水路再生を目指した「地域用水機能増進事業」、マナズとクワガタが会える里川の生き物環境の持続的な再生の試み、粟島西海岸の磯焼け対策など様々な取り組みを知ることができました。



写真－10 設楽技術士
(北陸支部)

3. 懇親会（その1）

交流研修会後、懇親会が開催され、中山北陸支部長、大島北海道支部長、吉川東北支部長の3支部長の挨拶の後、全国大会(福井)で運営を執られた笠松技術士の乾杯で和やかに夜の交流が始まりました。

北東3支部は積雪地域でありながらも、気候、歴



写真－11 中山北陸支部長の挨拶

史、文化、生活などそれぞれ特徴があり、それらの話題をお酒のつまみにしながら皆さんは交流の輪を広げていました。

新潟は米処、おいしい地酒が豊富です。日本酒好きの人は十分に堪能できたのではないのでしょうか。



写真－12 懇親会（立食パーティ）

4. 懇親会（その2）

立食パーティの懇親会終了後、古町にある老舗の鰻屋さんに場所を移して、2次会が行われました。2次会には芸者の“あおい”さんのもてなしもあり、皆さんこの時とばかりにあちらこちらで一緒に記念撮影をされていました。



写真－13 懇親会（2次会）の様子



写真－14 最後に皆さんで記念撮影しました

5. おわりに

平成21年度の北東3支部技術士交流研修会の当番は、北海道支部となっています。参加された皆さんは、北海道に行けば、これまた、おいしいものが食べられると大層期待されていました。

実は、柴田技術士の研究発表の際、エゾシカの話が出たこともあって、懇親会では中山、吉川両支部長から最初の挨拶で、次回の交流研修会でおいしいと聞いているエゾシカを食べられることに大いに期待していると振られ、宿題を課せられてしまいました。最後にこの場を借りておいしいエゾシカ料理の耳寄りな情報待っています。